

かかわり伝え合う小学校英語活動

南国市立大篠小学校 教諭 宮田 裕子

小学校における英語活動では、子どもたちが英語を使って人とのかかわり合いながら自分の思いを伝え合える楽しさや喜びを感じさせたい。そこで、子どもたちが楽しめる英語活動の在り方を探ることを目的とし研究を進めてきた。仮説を検証するにあたり、在籍校の子どもたちに、かかわり伝え合う体験的な活動を取り入れた授業を実施した。その結果、子どもたちは英語が分かる楽しさや、自分の思いを英語で伝える喜びを感じ、英語で人とのかかわることができたことなどが成果として得られた。そこで、喜びが自信に繋がり、英語を使って人とのかかわり、人との出会いを楽しむことを目標として、かかわり伝え合う小学校英語活動の在り方を提案したい。

キーワード：小学校英語活動、伝え合う、体験的な活動、学級担任、既習表現

1 はじめに

平成 15 年 3 月、文部科学省は、国民全体が「中学校・高等学校を卒業したら英語でコミュニケーションができる」英語力を身に付けるために、「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」を示した。これは、社会・経済の急速なグローバル化に伴い、国際的共通語の一つといわれている英語でのコミュニケーション能力を身に付けることの必要性和、英語を話すことへの苦手意識が相変わらず強いという国の課題が存在するためである。

小学校の英語教育については、上記の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」の中で、①「英語が使える日本人」を育成するためには、コミュニケーションの手段として英語を捉えること、②小学校における英語活動は、教員が一方的に教え込むのではなく、子どもたちが楽しみながら体験的な学習を行い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を育成することなどが示されている。

在籍校での経験を振り返ってみると、子どもたちが英語活動の中で楽しいと感じるときは、覚えた英語を言うことができるときや、身近な人たちと英語でコミュニケーションをする活動のときである。子どもたちは、不慣れな英語を使っての人とのかかわりを通して、「相手の言うことが分かる」「自分の言いたいことが伝わる」ことを体験することで、母語では感じることはできない喜びを実感できる。そして、英語を使う楽しさを知り、休み時間にも進んで英語で ALT とコミュニケーションを図ることができるようになっていく。また、自己表現の苦手な子どもたちが、英語活動を通して人とのかかわる楽しさを実感し、「やればできる」という自分のよさに気付くことで、人とのかかわりに自信が持てるようになっていく。つまり、母語において人とのかかわりが苦手な子どもたちも、英語でのコミュニケーション活動を通して、人とのかかわる楽しさに気付くことができると考える。

一般的に、保護者は「早くから親しませておいたほうが英語に対する抵抗感がなくなる」と考え、小学校で英語を学習すると流暢に英語が話せるようになっていくと思っている。しかし、小学校における英語教育の将来を見据えると、「英語を使って自分の思いを伝えたい」「英語を使って相手の思いを分かりたい」という気持ちを育てることに重点を置く必要があると考えた。

そこで、かかわり伝え合う体験的な活動を取り入れることにより、子どもたちは英語で表現することに気づき、英語を使って積極的に人とのかかわることができるのではないかと考え、仮説を設定し、研究を進めてきた。

2 研究仮説

小学校の英語活動において、かかわり伝え合う体験的な活動を取り入れることによって、子どもたちが英語で表現できることに気付き、英語を使って積極的に人とかかわることができるであろう。

3 研究内容

(1) 基礎研究

① 小学校における英語教育の目標及び内容の確認

様々な資料や文献にあたり、小学校における英語活動の捉え方や目標を確認し、研究の方向性を探った。

文部科学省から出された『『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』（平成 15 年 3 月）には、教師が一方的に教え込むのではなく、子どもたちが楽しみながら外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど、小学校段階にふさわしい体験的な学習活動を行い、積極的にコミュニケーションを図ろうとする意欲や態度を育成することが重要であるということが示されている。

また、「中央教育審議会外国語専門部会における審議の状況の報告」（平成 18 年 3 月）では、小学校の段階では、子どもたちの発達段階にふさわしい言語の使用場面を設定し、英語を用いて、相手を理解したり、自分を表現したりすることの楽しさを実感できる体験をさせることが重要であると述べられている。

以上のことを踏まえて、小学校では、英語でのコミュニケーション活動を重視し、相手に分かるような伝え方や、相手の言うことを分かってもらう態度など、人とかかわりを楽しむための素地をつくることが大切であると考えた。そのためにも、英語を使って人とかかわる体験的な活動を取り入れる必要がある。

また、小学校では、子どもたちのことをよく知っている学級担任が英語で人とかかわろうとするモデルになり、子どもたちと共に英語を学び、サポートしていくことが大切であると考えた。

(2) 実態調査（小学校英語に関する意識調査）

① 目的

週 1 時間の英語活動を 2 年半に渡り行ってきた在籍校の 6 年生の英語活動に対する意識を把握し、授業改善に生かすことを調査の目的とした。また、在籍校と、南国市内の小学校の管理職及び教諭に対する意識を把握し、教師も子どもたちと共にコミュニケーション活動を楽しむことができるための英語活動の在り方を探ることを調査の目的とした。

② 方法

小学校英語に関する意識調査を行うために、文部科学省が平成 16 年度に実施した、小学校の英語教育に関する意識調査結果の概要を参考にして、アンケートを作成し、分析した。

③ 結果

英語活動を好きな理由として子どもたちの回答の中で一番多かったのが、「歌・ゲームができるから」であった。その反面、「歌・ゲームが何となくはずかしい」「話す・聞くことに自信がない」ことが嫌いな理由として挙げられている。また、英語活動で行ってほしい内容は、「歌・ゲーム」「身近なものの名前を英語で言う」「外国の人との交流」など、実際に使える英語の学習であった。

一方、教師の意識調査結果から、約 8 割の教師は、英語活動を肯定的に捉え、子どもたちに人とかかわる力を付けさせたいと感じているが、「打ち合わせの時間の確保」「英語に対する苦手意識」などの負担も感じていることが明らかになった。

(3) かかわり伝え合う体験的な英語活動

① 全体的な活動の流れをパターン化

子どもたちにとっても教師にとっても負担感を軽減し、安心して英語活動を楽しむことができる方法として、全体的な活動の流れをパターン化した(図1)。また、体験的な活動では、「学級担任とALT」「学級担任と子ども」「子どもと子ども」が、かかわり合う活動を行った。

それぞれのかかわり合いの中で、子どもたちは、具体物を見ながら、学級担任とALTが話す英語の意味を推測し、活動に興味を持つ。そして、「絵を描く動作をしながら、この動作が英語ではdrawと言う」など、実際に体験しながら英語と日本語の意味とを一致させることで、新しく学ぶ英語に関心を持つ。更に、ペアやグループで友だちとかかわり合いながら、簡単な英語を実際に使ってみることで、「英語が分かる・伝わる」ことを体験し、伝え合う活動に意欲的に取り組むことができると考えた。

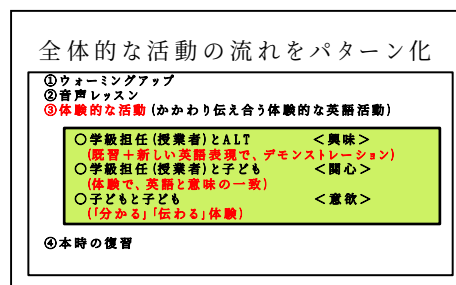


図1

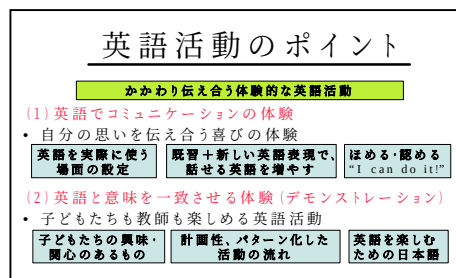


図2

② 体験的な英語活動

英語でコミュニケーションを体験すること、実際に体験をしながら英語と日本語の意味とを一致させることの2点を、体験的な英語活動と捉えた。そして、自分の思いを伝え合う喜びを実感し、楽しみながら活動できるように、英語活動で大切にしたいポイントをまとめた(図2)。

4 検証授業

(1) 検証授業活動計画

検証授業を行うにあたり、評価規準を作成し、活動計画を立てた。

① 英語活動1「絵文字を使って感情を表現しよう」(図3)

絵文字は、遊びの中でも見られ、子どもたちにとっては、身近な感情表現の方法である。そこで、遊びの中でも英語が使えることに気付かせ、英語活動に興味を持たせることができるのではないかと考え、題材を設定した。

② 英語活動2「感覚の表現を使ってクイズゲームをしよう」(図4)

クイズは、子どもたちにとって、身近な興味のある遊びである。知りたい情報を相手に聞き、聞かれた方は、ヒントとして自分の持っている情報を相手に伝えなくてははいけないので、自然に言葉のやりとりができる。更に、母語では恥ずかしさがあっても、英語でなら、より積極的なコミュニケーション活動ができるのではないかと考え、題材を設定した。

題材名:「絵文字を使って感情を表現しよう」 評価規準

評価項目	評価規準
ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度【関・意・態】	○英語でのコミュニケーションを楽しもうとする。
イ 理解の能力【理解】	○人とかかわりの中で、自分の思いを伝えるための英語表現を知り、使うことができた、友だちが英語で伝えようとしていることが分かる。
ウ 表現の能力【表現】	○自分の思いを伝えるために、知っている英語やジェスチャーで表現する。
エ 言語や文化についての気付き【気付き】	○日常的に使っているカタカナ語に英語と同じ意味があることを知り、友だちとかかわりの中で英語を使う楽しさに気付く。

題材名:「絵文字を使って感情を表現しよう」 活動と評価の計画(全3時間)

時数	活動内容	評価項目	評価方法	具体的評価内容
1	「Do you have ~? (～を持ってる?)」	アイ	・観察 ・観察	・英語を使って、友だちのことを知ろうとする。 ・身近な物の英語での言い方を知り、表現することができたり、友だちが英語で伝えようとしていることが分かる。
2	「いろいろな形をつくろう」	アエ	・観察 ・観察	・恥ずかしがらずに、友だちと英語を使って表現することをしようとする。 ・日常的に使っているカタカナ語に英語と同じ意味があることを知り、友だちとかかわりの中で英語を使う楽しさに気付く。
3	「形をつくって、絵文字で遊ぼう」	アウ	・観察 ・観察	・英語を使ってコミュニケーションを楽しもうとする。 ・自分の思いを伝えるために、知っている英語やジェスチャーで表現する。

図3

(2) 検証授業

英語活動 1、2 ともに、子どもたちが活動の中で覚えた英語を、実際に活用する場面を設定した。

① 英語活動 1 「絵文字を使って感情を表現しよう」(写真 1)

子ども同士がかかわる場面では、友だちに英語で指示をする、友だちの指示通りに行動するという活動を取り入れた。更に、第 3 時間目では、“Do you have scissors?”や“Scissors, please.”などの既習表現を使う必然性を感じる場面を設定した。

子どもたちが英語活動を楽しめる手立てとして、ペアやグループなどの少人数で友だちとかかわるようにした。そして、英語を使って友だちと協力しながら活動することで、人とかかわりを楽しめるようにした。

② 英語活動 2 「感覚の表現を使ってクイズゲームをしよう」

この单元では、「ミステリーボックス」(写真 2)と名付けた箱の中に具体物を入れ、「見る・味わう・触れる」体験活動を行った。クイズ形式を取り入れながら、既習表現を使って、子ども同士が英語で質問やヒントのやりとりができるようにし、友だちとかかわり合いながら、覚えた英語が使える場面を設定した。

子どもたちが英語活動を楽しめる手立てとして、英語を使ったクイズを作成するようにした。このことにより、友だちに分かりやすいヒントの伝え方や、知的好奇心をくすぐり、すぐには答えが分からないようなヒントの出し方を工夫するなど、友だちと相談しながら活動することで、人とかかわりを深めることができるようにした。

題材名：「感覚の表現を使ってクイズゲームをしよう」 評価規準

評価項目	評価規準
ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度【関・意・態】	○クイズやゲームを通して、人とかかわりを楽しもうとする。
イ 理解の能力 【理解】	○友だちとの言葉のやりとりを通して、身近な物の英語表現を知り、答えを言ったり、クイズをつくったりすることができる。
ウ 表現の能力 【表現】	○自分の思いを伝えるために、知っている英語やジェスチャーで表現する。
エ 言語や文化についての気付き 【気付き】	○身近な物の言い方についての日本語と英語の音やリズムの違いを知り、友だちとかかわりの中で英語を使う楽しさに気付く。

題材名：「感覚の表現を使ってクイズゲームをしよう」 活動と評価の計画 (全 3 時間)

時数	活動内容	評価項目	評価方法	具体的評価内容
1	「What is this? ① (これ、なあに?)」	ア ウ エ	・観察 ・観察 ・観察	・言葉のやりとりを通して、人とかかわりを楽しもうとする。 ・自分の知っている英語やジェスチャーなどで表現する。 ・果物の言い方についての日本語と英語の音やリズムの違いに気付く。
2	「What is this? ② (これ、なあに?)」	ア ウ エ	・観察 ・観察 ・観察	・言葉のやりとりを通して、人とかかわりを楽しもうとする。 ・自分の知っている英語やジェスチャーなどで表現する。 ・身近な物についての日本語と英語の音のリズムの違いに気付く。
3	「クイズ大会をしよう」	ア イ ウ	・観察 ・観察 ・観察	・クイズゲームを通して、人とかかわりを楽しもうとする。 ・身近な物の英語表現を知り、答えを言ったり、友だちと協力してクイズをつくったりすることができる。 ・自分の知っている英語やジェスチャーなどで表現する。

図 4

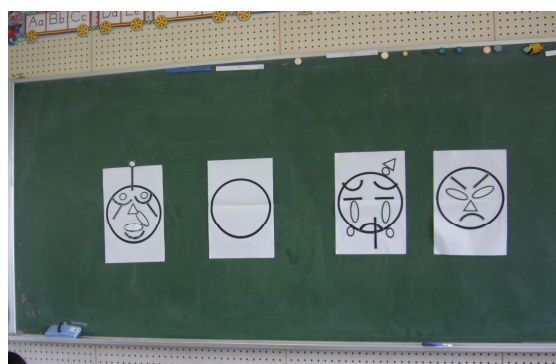


写真 1



写真 2

(3) 検証結果

検証授業での活動の様子や、ふりかえりカードを基にして、以下の5つの項目で検証した。

①＜活動内容が、子どもたちの興味・関心のあるものであったか＞

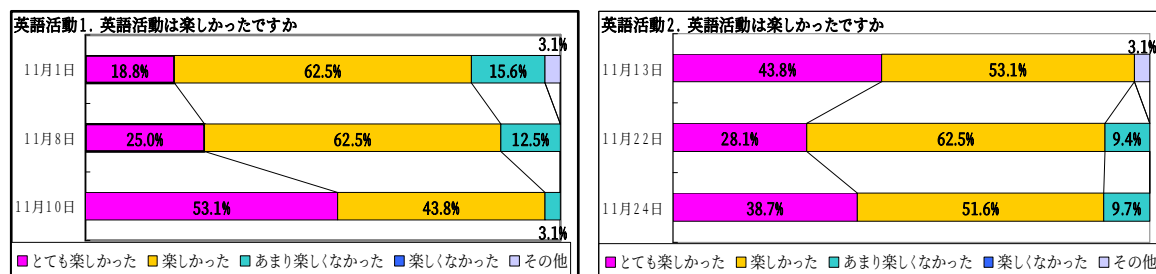


図5

英語活動1では、子どもたちの遊びの中でも見られる絵文字をつくることを活動に取り入れた。この活動は、「友だちに英語で指示をする」「友だちの英語の指示通りに絵を描く」など、英語を使って友だちに伝えなくてはいけない、英語を聞き取りながら行動しなくてはいけないという活動である。この活動を通して、それまで英語活動が「あまり楽しくない」と感じていた子どもたちも、「友だちが英語で分かりやすく伝えてくれたから、指示通りの絵を描くことができてとても楽しかった」と感じている。

また、英語活動2では、既習表現を使いながら友だちと質問やヒントのやりとりを行ったり、体験しながら新しい英語表現を学んだりする活動であったので、子どもたちは友だちと協力しながら、クイズづくりやクイズ大会を楽しんでいた（図5）。

②＜英語が「分かった」「伝わった」という成就感を得られたか＞

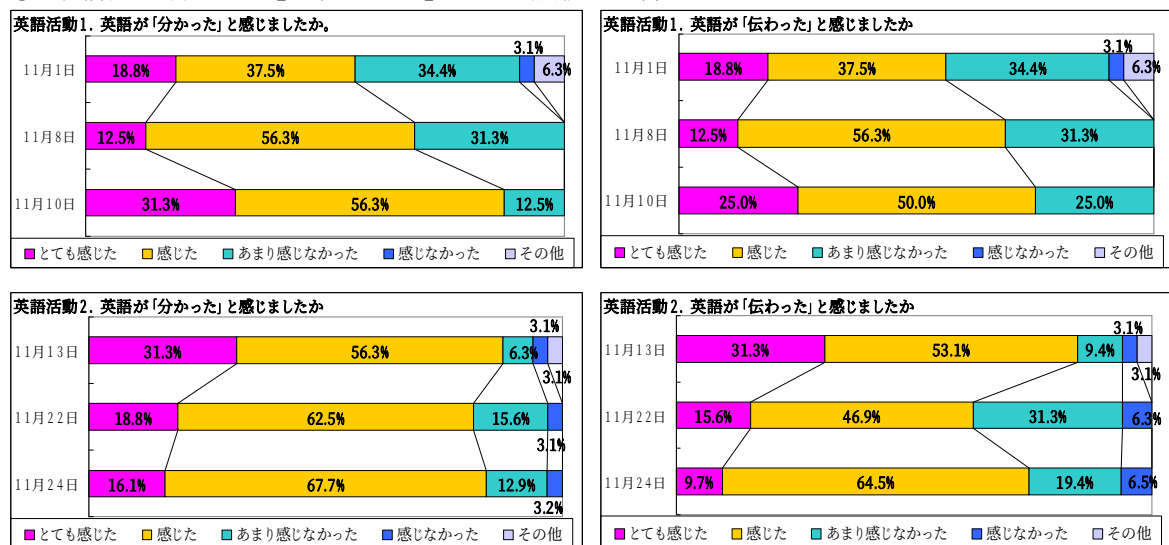


図6

英語活動1、2を通して、「英語が分かった」と感じる割合は、1回目の活動の時には、クラスの約5割であったが、6回目の時には、約8割に増加していた。

また、「英語が伝わった」と感じる割合も、1回目の時は、約5割であったが、6回目の時には、約7割の子どもたちが、「英語で伝えることができるようになった」と感じている。

これは、既習表現を使って、子ども同士が英語でやりとりする場面が多かったからである。そして、ペアやグループになり、自分が知っている英語の知識を全て使いながら英語でやりとりをしたことで、子どもたちは「英語が分かった」「英語が伝わった」と感じている（図6）。

③＜英語で人とかかわる中で、自分のよさや友だちのよさに気付くことができたか＞

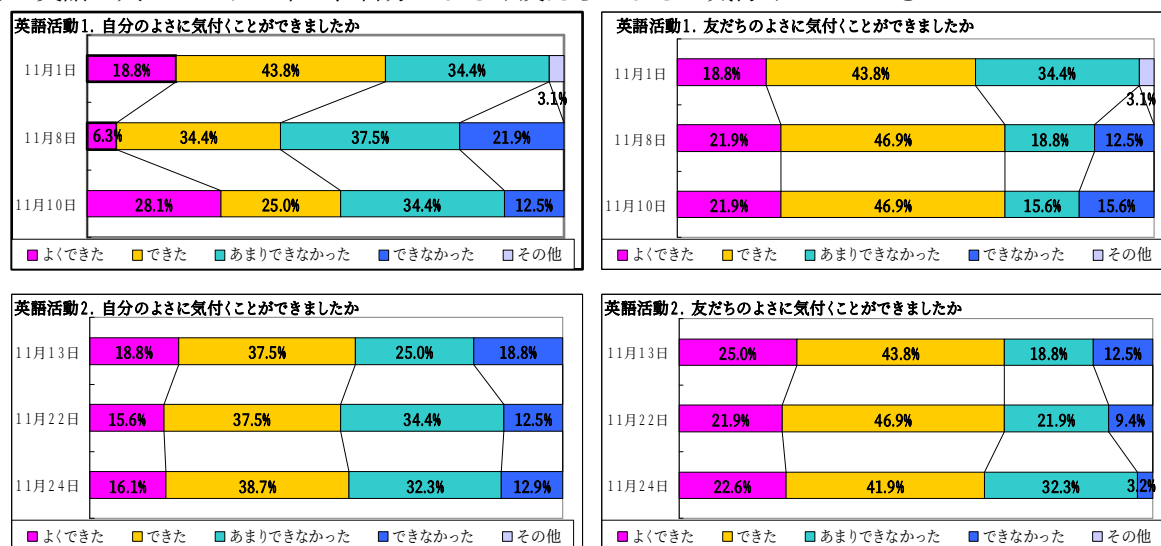


図7

ふりかえりカードで、一人一人の変容を見ていくと、「英語で言おうとしていた」「友だちと自分の英語が分かってきた」など、子どもたちは、今までとは違う自分に少しずつ気付いている。

また、「自分の伝えたことを分かってくれて、嬉しかった」「友だちが、私のことを考えてヒントをくれた」など、友だちのよさにも気付いている。

子どもたちは、人とかかわり合う活動を通して、自分が伝えようとする英語を友だちに分かりてもらえたことで、英語を話すことに自信が持てるようになっていく。また、友だちが分かりやすく伝えてくれたことで、友だちのよさも感じている（図7）。

④＜人とかかわりに自信がもてるような活動内容であったか＞

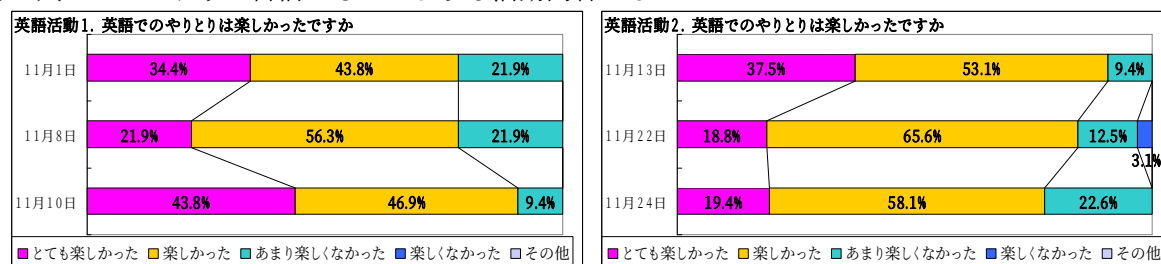


図8

英語活動1では、子どもたちは、英語でのやりとりを楽しんでいる割合が増加している。しかし、英語活動2では、英語でのやりとりを楽しんでいる割合が少しずつ減少している。

子どもたちは、活動の流れが分かり、既習表現を使ってのやりとりを楽しんでいた。その一方で、英語表現をすぐに理解でき、更に新しい英語表現を知りたいと感じている子どもたちもいた。

英語活動1、2を工夫しながら活動に連続性を持たせたことで、人とかかわりを楽しむことができ、人とかかわりに自信を持てることができた（図8）。

⑤＜「体験的な活動」では、英語を使ってみたいと思う場面の設定が適切であったか＞

子どもたちに、既習表現が使えることを実感させるために、実際に「英語を使って、はさみを借りなくてはならない」「絵を描く作業に必要な物を教師からもらわなくてはならない」という場面を意図的に設定した。このことにより、子どもたちは、英語を使う必然性を感じ、既習表現や自分の

知っている英語表現を使って、必要な物を手に入れることができた。また、子どもたちの興味のある内容や身近なことをかかわり合う体験的な活動の中に取り入れることにより、楽しみながら既習表現を活用できるようにした。子どもたちは、友だちとかかわり合いながら、英語が通じる経験を積み重ねることで、活動の中でも日本語を使うことが少なくなった。そして、絵文字をつくるときなども、すぐに形の名前を言わずに、前時の描き方の英語表現を使うなど、覚えた英語が使えるときには、子どもたちは進んで英語を使って活動していた。

このことから、英語を使ってみたいと思うときは、子どもたちの興味のある内容や、身近なことを英語で友だちに伝える活動のとき。また、実際に、覚えた英語が活用できるときである。

(3) 検証授業の考察

体験的な活動の中に、「既習+新しい英語表現」を使うことは、在籍校の算数の取組を参考にした。算数の学習では、「昨日の学習との違い」を子どもたちに気付かせ、既習事項に着目させることにより課題解決を行っている。これは、子どもたちに学びの連続性を意識させると共に、自ら学ぶ楽しさにも気付かせることができる。

この方法を、英語活動に取り入れた。英語を実際に活用する場面において、子どもたちは、既習表現や、自分の知っている英語表現などを使いながら、何とかして友だちに英語で伝えようとしていた。そして、「友だちが、『イエス』と言ってくれた」「伝えたことを分かってくれた」と感じたことで、自分の言いたいことが英語で伝わったことを確認することができた。また、「友だちの英語が分かって、指示通りの絵を描くことができたからうれしい」「友だちに英語でヒントを言いながら問題を出したり、英語で答えたりしたから楽しい」など、子どもたちは友だちの英語が分かる喜びを感じ、進んで英語を使って友だちとかかわる楽しさを実感することができた。

更に、子どもたちの興味・関心のあるものや、身近なことを体験的な活動に取り入れ、英語と意味とを一致させ、体験しながら新しい英語表現を習得したことで、学ぶ楽しさを感じることができたと考える。

(4) 検証授業後の子どもたちの意識調査

検証授業を行ったクラスの子どもたちに検証授業後に、再度、意識調査を行った(図9)。

その結果、「英語活動が楽しい」の割合は、検証授業前は15.5%であったが、検証授業後には20.5%に増加していた。また、「歌・ゲームが何となくはずかしい」「友だちとうまく英語でのやりとりができない」などの英語活動が嫌いな理由も、検証授業後には減少していた。

このことから、英語活動を楽しめる子どもたちが増加し、友だちと英語でのやりとりができるようになったことを、子どもたち自身が感じていることが分かった。

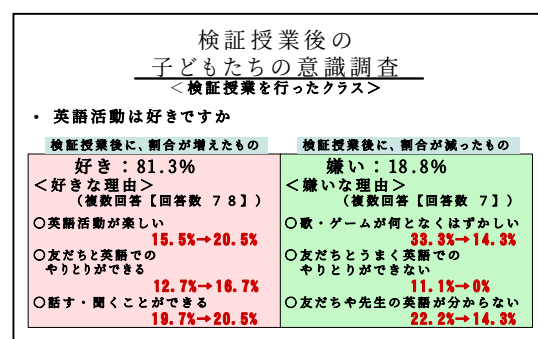


図9

5 成果と課題

子どもたちに人とかかわる楽しさに気付かせるために、英語で友だちや教師とかかわり合う体験的な活動を取り入れた。そして、体験的な活動の中に、既習表現を使って英語を実際に活用する場面や、英語を使う必然性を感じる活動を取り入れた。このことにより、子どもたちは、母語ではない英語を使って自分の思いを伝える難しさを体験することで、相手に分かるような伝え方や、相手の言うことを分かろうとすることの大切さに気付くことができた。そして、既習表現を使って英語でやりとりをし、友だちが反応したことで、子どもたちは「英語が分かった」「英語が話せた」と、英語でコミュニ

ケーションができる楽しさや喜びを実感することができた。このことにより、人とかかわりが苦手な子どもも、ペアやグループ活動を通して人とかかわりに自信が持てるようになり、人とかかわりを楽しむことができた。

また、実際に体験しながら英語と日本語の意味とを一致させたことで、子どもたちは英語の意味を推測し、学ぶ楽しさを感じることができた。

更に、活動の流れをパターン化することで、子どもたちも教師も次の活動が予想でき、安心して活動することができた。また、活動内容の打ち合わせの時間短縮にもなった。

今後の課題として、やはり、学級担任の英語活動に対する意識の捉え方が大切になってくると考える。まずは、日本語を交えながら英語活動を行ったり、普段の授業の中で少しずつ英語を取り入れたりするなど、教師自身が、英語が下手でも英語を学ぼうとする姿勢を見せることによって、子どもたちの共感を呼び、子どもたちと教師の人間関係を築けるのではないかと感じた。

また、検証授業を通して、簡単な英語表現を使った言葉のやりとりを楽しんでいる子どもたちがいる一方で、人とかかわりを楽しむことはできるが、更に新しい英語表現を知りたいと感じている子どもたちもいて、簡単な言葉のやりとりだけでは達成感を得られない子どもたちもいることが分かった。一人一人が英語活動で達成感を得られようするために、在籍校の算数の学習で取り入れている「ミニティーチャー」を活用し、子どもたちが教師の代わりの役をするなどの英語活動づくりの工夫が必要である。

6 おわりに

1年間、小学校における英語活動についての研究を行うことができた。研究を通して、小学校では、英語で人とかわることの楽しさを体験させ、英語を子どもたち一人一人の可能性を広げるための手段と捉えることが大切であると改めて感じた。このことを根底にしないと、子どもたちも教師も負担を感じるものとなり、小学校段階から英語嫌いを増やすことにもなりかねない。

また、小学校の英語活動が、中学校や高等学校の英語に繋がっていくことも意識しないといけないと感じた。小学校では、人とかかわるためのコミュニケーションの素地をつくることが大切である。そのためにも、人とかかわりを楽しめる体験的な活動を取り入れ、英語活動に対して興味・関心を持たせるようにすることが大切である。また、学級担任が英語で人とかかわろうとするモデルになり、子どもたちと共に英語を学ぼうとする姿勢が求められる。

検証授業では、人とかかわる楽しさに気付かせるために、コミュニケーションを重視した活動を行ったが、子どもたちは活動を通して、英語について更に深く興味を持つようになり、「おでんは英語で何と言いますか」「こんにゃくは外国にありますか」などの質問が多く出てきた。

また、教育センター所属のALTが検証授業を見に来てくれたとき、自分の英語が本当に通じるか確かめたくて、積極的に話しかけていく子どもたちもいた。

これからも、英語を使ってコミュニケーションを楽しむ英語活動づくりをしていきたい。

<主な引用・参考文献>

- (1)「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画 ホームページ」(文部科学省 平成15年3月)
- (2)「小学校の英語教育に関する意識調査結果の概要(中央教育審議会教育課程部会外国語専門部会第13回議事録 ホームページ)」(文部科学省 平成17年度)
- (3)「『小学校英語活動 指導計画と活動事例集(試案)』を基にした「実践事例集 STEP1・2」(京都市教育委員会 平成16年12月)
- (4)「今日から始める小学校英語指導の基礎・基本」(渡邊寛治 教育開発研究所 平成15年9月)
- (5)「中央教育審議会教育課程部会(第39回第3期第25回平成18年3月『小学校における英語教育について(外国語専門部会における審議の状況)』 ホームページ)(文部科学省 平成18年度3月)